

名古屋 文化 情報

2026

Winter

No.416

NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery／日動画廊 名古屋支店

隨想／歌人・詩人 千種創一さん

この人と…／声楽家 井原義則さん

視点／国際芸術祭「あいち2025」を巡って

#zoom up／俳優 黒河内彩さん



表紙

「くらり」

(2025年/H45.5cm×W45.5cm/キャンバスにアクリル絵具)

手数が少なくとも絵画として成立するように制作しています。

薄めた絵具で描かれた山のようなかたちの図が上下左右に配置され、色彩は図像が重なることで混色され新たなかたちも生まれてきます。



(撮影：城戸保)

Contents

Pick Up Gallery 日動画廊 名古屋支店	2
隨想 歌人・詩人 千種創一さん	3
この人と… 声楽家 井原義則さん	4
視点 国際芸術祭「あいち2025」を巡って	8
#zoom up 俳優 黒河内彩さん	10

「なごや文化情報」編集委員

大寺資二 (舞踊家・大寺資二バレエアカデミー主宰)
 黒田杏子 (ON READING)
 小塚憲二 (作曲家・編曲家)
 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
 常磐津綱鵬 (常磐津奏者)
 望月勝美 (編集者・ライター)

佐藤克久

1999年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科油画専攻修了
 2023年 個展「あけっぴろげ」(See Saw gallery+hibit/名古屋市)
 2024年 個展「空っぽ」(Maki Fine Arts/東京都)
 2025年 開館30周年記念コレクション展
 「VISION 星と星図 I:社会と、世界と」(豊田市美術館)
 2025年 教員展Vol.8「こりごりごり」(名古屋造形大学ギャラリー)
 ウェブサイト <https://www.instagram.com/satokatsuhisa/>

Pick Up Gallery



画廊外観

設立 1962年 代表取締役社長 長谷川徳七
 住所 〒460-0003 名古屋市中区錦2丁目19-19
 電話 052-221-1311

日動画廊 名古屋支店

日動画廊は1928年に創業、日本で最も歴史のある洋画商として、油彩、彫刻、版画を主に、内外の物故・現存あわせてその取り扱い作家は数百名に及びます。東京銀座に本店を置き、名古屋、福岡、軽井沢、パリに支店があります。1966年には若手作家の育成のために昭和会展をスタート。国内外を問わず現代の美術界の最新作品も幅広く収集しています。名古屋支店は1962年に開設し63年の実績を誇ります。美術館、コレクターの信頼できるパートナーとして活動しています。

取り扱い作家 藤田嗣治、梅原龍三郎、香月泰男、北川民次、三岸節子
 鴨居玲、木村忠太、石垣定哉 ほか
 ウェブサイト <https://www.nichido-garo.co.jp>

隨想

愛憎と金木犀



歌人・詩人
ちく くわ そう いち
千種創一

名古屋生まれ。2015年、歌集『砂丘律』を上梓。2016年、日本歌人クラブ新人賞他受賞。2020年、歌集『千夜曳獵』を上梓。2021年、現代詩「ユリイカの新人」賞受賞。2022年、詩集『イギ』、ちくま文庫版『砂丘律』を上梓。2025年、歌集『あやとり』上梓。

中央。というものに対する愛憎がある。畏怖とも呼べるかもしれない。

僕は名古屋で生まれ育った。小学生の頃、漫画雑誌に広告の載るミニ四駆大会など子ども向けイベントの多くは東京で開かれていて、不満だった。物書きになった今日でも、重要な文学イベントの大部分が東京で開催されていることは果たして健全なのか、とよく思う。

名古屋について考えるとき、言葉を生業とする僕としては、名古屋弁に思いを馳せないわけにはいかない。共通語よりもやや複雑な敬語体系と母音を持つ、柔らかい響きの方言だ。しかし、中央政府の定めた共通語のせいで、名古屋の言葉は消えつつある（もちろん共通語がなければ遠方の人々との意思疎通もままならないし、共通語は日本国民意識の形成・維持のための必要悪ではあるが）。

こんな問題意識から、新刊を出す際には名古屋でイベントを開いてきたし、今年『あやとり』という名古屋弁の短歌を収録した本を編んだりした。短歌は、様々な時代の書き言葉を混成した共同幻想的な「文語」もしくは現代共通語の「口語」で書くのが常識だが、そして僕は言語学者でも民俗学者でもないが、消えゆく名古屋の言葉をなんとかして残したいと思ったことが、祖母にインタ

ビューをして名古屋弁で『あやとり』を編み上げた動機の一つだ。

高校の頃から、降ってくる短歌を一人でノートに書き留めていた。短歌を詠む若者は世界で自分だけだろう、と勝手に思い込んでいた。しかし大学から東京へ出て、一人ではないことを知った。東京で、歌人や詩人、現代アート作家と出会い、多くを学び、今の僕がある。その意味では、東京に感謝している。

名古屋に住んでいた頃、やっと涼しくなって夜、網戸を開けたまま寝ると、庭から不思議な匂いがしてくることに気づいてはいた。それ以上深くは考えず、なんとなく秋の匂いだ、と思っていた。大学から東京で暮らし始めて、そこで知り合った人から、散歩の最中に「これ、金木犀の香りだよ」と教えてもらった。庭のあの「秋の匂い」は金木犀の匂いだったのか、と気がついた。かつて親しかったその人を金木犀とともに記憶している。名古屋の庭に帰って、匂いに気づいて、空を見上げると、雲のように金木犀の花が群れて咲いているのが見えた瞬間を覚えている。

これからも僕は愛と憎の間で揺れると思うし、名古屋には名古屋の、金木犀のような誇りを持ってほしいと願っている。

この人と...



声楽家

い は ら よ し の り

井原義則さん

声楽家、演出家、指導者として活躍

名古屋を拠点にオペラやミュージカルなどで数々の主役を務め、コンサートでも多くの観客を魅了してきたテノール歌手の井原義則さんは、今なお現役で歌い続けている。歌だけでなく演技にも定評があり、時には演出までも手掛けてきた。音楽教員として勤めながら半世紀近い間、第一線で活躍してきたその原動力を探るべく、今日までの歩みを伺った。

(聞き手: 小塚憲二)

歌の大好きな男の子

井原さんは1955年、佐賀県で姉と兄の3人兄弟の末っ子として生を受けた。

「父は炭鉱で働いていました。歌を歌うのは炭坑節くらいで、音楽にはあまり興味は無かったと思います。炭鉱の仕事というのは大変危険で、場合によっては命に関わるということもあります。私が7歳の時に大阪に出て鉄工所に勤めることになりました。引っ越したばかりの頃は、祖母も含め家族6人で6畳一間での生活でした」。

高度経済成長が始まった頃の日本人の生活ぶりが偲ばれる。

「歌好きの姉の影響でしょうか、私も幼い時から歌が大好きで、歌謡曲やアニメソングなどをいつも歌っていました。ちびっこどじまんのオーディションも受けました。その頃から将来は歌手になりたいと思っていました。布施明さんみたいになれたらいいなって。でも今から思うと歌謡曲の歌手にならなくてよかったです。自分の持ち歌といいましょうか、同じ曲ばかり歌わないといけないですからね(笑)」。

クラシックだけでなくポピュラーソングも歌うことの多い井原さんは、幅広いレパートリーを持つ歌手である。その後、大阪府立東住吉高校に進学し、2年生の頃から音楽大学に進もうと決心する。当初は関西の大学へ進学を考えていた



4才頃兄と

が、声楽家・カンツォーネ歌手としても活躍する新井裕治さんが愛知県立芸術大学（以下「愛知県芸」）から、たまたま教育実習生として来ていたことがきっかけとなり、創立間もない時期で素晴らしい環境と設備が新しかったことにも惹かれて、愛知県芸を受験することになった。

舞台芸術に魅せられた学生時代

1974年、愛知県芸声楽科に合格して、新たなスタートラインに立つことになった。井原さんは9期生だが、新しい学舎の中で、多くの学生は皆、自分達が将来を切り開いていくんだ、という強い意気込みを持っていたと語る。名古屋二期会の設立メンバーでもある洞谷吉男先生から、ドイツ歌曲を中心に指導を受ける傍ら、舞台公演の創作にも関わることになる。

「2年生の時に先輩に誘われ、『トン・キホーテの星』というミュージカルに出演しました。作曲科の学生が書いた作品で、初演では村人役だったんですが、数ヶ月後再演したときは、より重要な役をもらいました。今だからお話ししますが、大学では2年生までは外部公演への参加が認められていなかったので、芸名で出演しました(笑)」。

その翌年、愛知県芸大学祭のオペラ『白雪姫』では重要な役割を果たすことになる。

「この舞台の総予算はわずか2万円でした。お金が無い以上、何でも自分達でやるしかないということで、自分達で台本を書き、やはり作曲科の学生に曲を書いてもらいました。この時は主役の王子役をもらいましたが、演出も私がすることになりました。この作品は、愛知県芸の近くにある長久手小学校で再演もしています」。



愛知県芸大学祭のオペラ『白雪姫』王子役(1977年) 長久手小学校

このオペラ『白雪姫』がきっかけとなり、人生の伴侶である千葉妙子さんとのご縁が深まったとのこと。小人役として同公演に出演していた声楽科の同期生であった妙子さんとの交際がはじまり、大学院に入ったタイミングで学生結婚。現在に至るまで何度も共演を重ね、歌い手同士のご夫妻として広く知られるようになった。

青年時代の演奏活動

1980年に愛知県芸大学院を修了し、南山高等学校・中学校で音楽教諭の職に就く一方、歌い手として活躍するチャンスもつかんだ。名古屋市に拠点を置く代表的な合唱団のひとつ「グリーン・エコー」でソリストのオーディションがあり、ドヴォルザークのレクイエムでソリストに選ばれる。この時の指揮者が外山雄三氏だった。当時、名古屋フィルハーモニー交響楽団の常任指揮者を務めていた外山氏との思い出を語っていただいた。



外山雄三指揮、ドヴォルザーク レクイエム(グリーンエコー) ソロ(1981年)

「とても厳格な先生でした。合唱団の皆さんには先生が来るたび、すごく緊張していましたし、稽古ピアニストに対しても厳しく指導していました。それでもカリスマ性があって、偉大で魅力的な方でした。」

外山氏にはその後何度も抜擢され、オペラや宗教曲で数多くの共演を果たすことになる。この時期のもうひとつ特筆すべきことは、名古屋ミュージカル協会が制作するオフ・プロードウェイの名作ミュージカル『ファンタスティックス』への出演である。当時の名古屋はミュージカルの黎明期で、地元制作はほとんど無かった。名古屋ミュージカル史の1ページ目を飾るこの公演で井原さんが主演を務めたことは、昨今のミュージカル活況を考えると象徴的である。

ピッコロオペラに参加

演出家の伊藤正規氏が1981年に立ち上げたピッコロオペラは、ピッコロ（イタリア語で「小さい」の意味）の名前が示すように、主に小劇場で比較的短編作のオペラの公演を行なっていた。

「最初に観たときはオペラというよりも、芝居の上に音楽が乗っているという印象でした。妻が先に入っていたのですが、私も誘われて参加することになりました。1984年の『アメリカ舞踏会に行く』が初参加の作品です。」

演出家の伊藤氏は愛知県芸の先輩だったそうで、その人となりについてお尋ねしてみた。

「あまりメジャー指向ではありませんでした。それよりも少数でもいいのでファンを大事にしようというスタンスの方で、才能に溢れていて、オペラを演じる上での演技の重要さや、自分の感性の枠を超えて役に成り切ることなど、多くのことを学ばせていただきました。私の歌手人生にとって大いに影響を受けた方です。」

20年程在籍したが、その後もピッコロオペラの活動は続いている、最近も客演としてコンサートに出演している。



ピッコロオペラ『魔笛』タミーノ役(1994年)

総合舞台芸術公演で活躍

1984年、名古屋市芸術創造センターが開館、併せて財団法人名古屋市文化振興事業団（以下「事業団」。現在は公益財団法人）が設立された。演劇、音楽、ダンスの要素が融合した総合舞台芸術であるミュージカルやオペレッタを毎年上演し、2025年現在で40作品を数えるに至っている。井原さんにとっても魅力的な企画で、これまでに10作品以上に出演し、そのほとんどで主役を演じた。

「楽しかったですね。出演者はオーディションで選ばれるのですが、役者と歌い手、それにダンサーが一堂に会して稽古するのは初めての経験でした。それぞれ気質が違っていて、役者からは本番で最大限の力を出し切る集中力を感じましたし、ダンサーは黙々と身体の鍛錬を繰り返していることに感心しました。私と同世代の若手も多く出演していて、舞台を通じた交流はその後も続いているし、貴重な機会になったと思います。」



総合舞台芸術公演ミュージカル『トニーとマリア』トニー役(1986年)



芸術創造賞授賞式
西尾名古屋市長(当時)、妻・長女と(1986年)

1986年、『ウエストサイド物語』を下敷きにしたミュージカルコンサート『トニーとマリア』に主演したことが評価され、事業団が独自に授与している芸術創造賞を受賞。1989年にはオペレッタ『メリー・ウィドウ』に主演したが、この時の演出は、日本を代表する演出家の宮本亞門氏だった。

「まさに天才と言って過言ではない方でした。振付もご自分でなされましたし、音楽についても大変精通しておられました。それでいて、決して押し付けることなく、明朗快活で優しく、迷いなく演出されていたことを覚えています」。



総合舞台芸術公演オペレッタ『メリー・ウィドウ』ダニ役(1989年)

歌と演技そして観客

総合舞台芸術であるミュージカルなどでは歌い手にも演技力が要求される。井原さんは学生時代以来、ミュージカルの出演経験も豊富なためか特に戸惑うことは無かったとのことだが、声楽家が演技することの難しさについて次のように語ってくれた。

「声楽家はどうしても歌に意識が集中してしまいます。うまく歌おうとする意識と同様に演技に対する意識を両立できれば、観客も自然と作品の世界の中に入していくかと思うのです」。

観客を大事にしたいという思いから井原さんは次のように続けた。

「私はオペラの原語上演があまり好きではありません。原語の方が歌いやすいとか、原語上演こそが本物なんだという考え方なのかもしれません。それは歌い手のエゴなのではと思います。お客様も字幕で物語を読むよりも日本語で歌を通じて物語を聴きたいのではないでしょうか」。

熱く語るその言葉には大いにうなずけるものがあった。

ウィーンへの留学

1988年、広報なごやで海外留学支援の募集の知らせが目に留まり、短期留学。これがきっかけとなって、愛知県芸大学院修了以来音楽教諭を勤めていた南山高等学校・中学校の教員留学制度で、次の年から3年間のウィーン留学が実現し、幸いにも家族でウィーンに住むことができた。メゾ・ソプラノ歌手として活躍していたヒルデ・レッセル＝マイダン氏が開設した生徒数10人程度の小規模な音楽学校に入学する。マイダン先生からどのようなことを学んだかお尋ねしてみた。



ウィーン留学 マイダン先生宅で

「声を聴く耳を養うことが出来たと思っています。他人の歌を聴いて、『これはいい声だ、おそらくこんな発声の仕方をしているんだろうな』ということが分かるようになりました」。

他人の声を聴いて自身の声を高める術を会得したということであろう。また、井原さんはこの留学の際にも出身国が異なる仲間とともに舞台を創り、演出を手掛けるという貴重な機会を得た。

「留学生仲間と4人でモーツアルトの『バステインとバステインヌ』というオペラを上演しました。出演者もわずかな小作品ではありました。ドイツ語でコミュニケーションをとりながら四苦八苦して演出しました。マイダン先生も大変喜んでくれました。とてもいい思い出です」。

1992年に帰国するまでの3年間は、今の活動に活かされる貴重な学びの期間だったことだろう。

円熟期を迎えての大活躍

留学を終えて帰国した井原さんの目ざましい活動が再スタートする。先にも触れた事業団の総合舞台芸術公演に出演を重ねるほか、名古屋二期会や名古屋オペラ協会主催のオペラでも数多く主演することになる。またこの時期以降、名古屋でも和物とも呼ばれる時代劇をはじめとする創作オペラが盛んに創られるようになり、井原さんも古代から江戸時代まで様々な歴史上の人物を演じている。

「創作オペラの場合、あらかじめ私の声の高さや声質に合わせて作曲してくれることもあり、とてもありがたかったです。また和物は、洋風な生活に慣れてしまっているからなのか、所作や立ち居振る舞いが難しかった反面、髪は我ながら似合うと思いました。やはり日本人なんだなと再認識しました(笑)」。

地方自治体等が主催する市民参加型の創作オペラが盛んに創られるようになったのも1990年代からである。1997



総合舞台芸術公演オペレッタ『こうもり』
アイゼンシュタイン役(1996年) 飯田みち代さんと

年に多治見市文化会館開館15周年記念事業として創られた『オリベ焼文様』では、茶人武将として高名な古田織部役で出演。初演以来10回に渡り再演を重ねている。2025年には名古屋演奏家ソサイエティー創作音楽劇『散りぬべき』で、主人公細川ガラシャの父親である明智光秀と本能寺の変で討たれた織田信長をダブルキャストで演じた。ドラマチックな脚本や作曲もすばらしく、思い入れの深い作品の一つのことである。



名古屋演奏家ソサイエティー『散りぬべき』明智光秀役(2025年)

夫妻で開くコンサート

演奏家という職業は、依頼を受けて報酬を得ることで成立する。だがそれでは飽き足らず、自らコンサートを企画する演奏家も多くいる。井原さんもそのお一人で、2000年に『井原さんちのコンサート』と題して、妙子さんと2人でご夫妻によるコンサートを始めた。

「依頼されてコンサートに出演することはたくさんありますが、お客様のことを思ってプログラムを組むと、日本歌曲やイタリアの歌が多くなるのは当然です。それなら自分達で立ち上げて、自分達の思い通りの選曲にしようと企画しました。入場無料なので好きにやらせてもらっています(笑)」。

なお、このコンサートは歌曲ばかりでなく、短いオペラも上演するなど盛りだくさんの内容になっている。

「男女の物語を創りたくて知人にストーリーを考えてもらいました。それに合った曲を、著名なオペラから選んで、歌詞も書き換えて歌いました。お客様に喜んでもらえるように名曲ばかり集めました」。

このコンサートはこれまでに10回の開催を重ねている。2015年に一旦休止したが、2026年には久しぶりの開催を予定している。

音楽の指導者として

井原さんには、南山高等学校・中学校の音楽教諭を長く勤めてきた、指導者としての顔もある。

「生徒が音楽を好きになってくれることを第一に考えました。男子校なので中学に入ったばかりの生徒達はちょうど変声期を迎える頃で、思うように歌うことが出来ないことが多いのです。そこで、まずは頭で理解してもらおうと思い、なぜこの音からこの音へと繋がっているのか、音符とは何か、ということから丁寧に説明しました。音楽鑑賞では軽い曲を選びました。例えばケテルピーの『ペルシャの市場にて』を聴かせて、作曲者はペルシャに行って何を感じたのだろうか、などと考えもらったりしました。高校生からは選択科目になるので、もとより音楽が好きな生徒が集まってくれました。ギターを教えて合奏したり、シンガーソングライターのように作詞・作曲し、自分で歌ってもらったりしました」。

さらに井原さんは、プラスバンド部も自ら立ち上げている。

「立ち上げるためにも楽器を揃えないといけないため、予算を認めてもらうのが大変でした。それでも3年程で揃えることが出来て、30人規模のプラスバンドを誕生させました。始めのうちは私も細やかに指導していましたが、生徒に任せた方が自立心が芽生えますし、創意工夫も生まれるため、意図的に一步引いて見守るよう心掛けました。結果としては成功したと思います」。

50歳になったとき、常勤教諭を勤めながらの音楽活動はやはり負担も多く“歌い手として活躍できる時間には限りがある”と、2006年に退職し、音楽活動に注力しつつも、名古屋圏域で大学等の非常勤講師を務めることにした。

「2008年からは、愛知県芸で非常勤講師として15年にわたりオペラの授業を担当しました。母校で講師を務めることができたのは、誇らしく嬉しいことでした」。

将来の担い手に向けて

インタビュー時点(2025年9月)で古希(70歳)を迎えた井原さんに、将来を担う若い人達への助言をお願いした。

「私たちの世代が最前線で活動しているようでは先が思いやられます。若手の皆さんもより精力的に活動してもらいたいですね。舞台芸術というのはすごく労力もお金もかかるので、どうしても二の足を踏んで、諦めてしまうのでしょうか。困難はあっても立ち向かおうとする情熱をもってもらえるといいですね。また、最近は東京へ出たがる若者も多いようですが、私はあまり勧めません。主演を勝ち取る実力があっても、東京ではチャンスも多い反面、ライバルも多いですからね。結局、名古屋にいた方が、より多くの舞台を経験することができると思うのです」。

井原さんはこれまでにオペラ、ミュージカルなどの舞台公演に133回も出演している。その他、コンサートやリサイタルなどを含めると700回を超える出演を重ねてきた。名古屋を拠点にしながら活躍を続けてきた井原さんという成功例があればこそ、若い人達には一層の奮起を!と切に願っている。

国際芸術祭「あいち2025」を巡って

2025年9月13日から11月30日まで、現代美術を基軸に多様なアートの表現を発信する国際芸術祭「あいち2025」が開催された。初めて海外から芸術監督に就任したフール・アル・カシミさんは、今回のテーマ/コンセプトを「灰と薔薇のあいまに」と名付けた。このテーマに込められた想いを探るべく国際芸術祭「あいち2025」を巡った筆者が、印象的な作品・作家を紹介していく。

(まとめ:鈴木敏春)

灰と薔薇のあいまに

枯れ木に花は咲くのか
灰と薔薇の間の時が来る
すべてが消え去り
すべてが再び始まるときに*

“モダニズムの詩人アドニスは、1967年の第3次中東戦争の後、アラブ世界を覆う灰の圧倒的な存在に疑問を投げかけ、自身を取り巻く環境破壊を嘆きました。アドニスの詩において、灰は自然分解の結果生じるものではなく、人間の活動による産物、つまり無分別な暴力、戦争、殺戮の結果なのです。環境に刻まれた痕跡を通して戦争を視覚化することで、アドニスは、直接的な因果関係や現代的な領土主義の理解ではなく、地質学的かつ永続的な時間軸を通して戦争の遺産を物語ります。したがって、アドニスにとってそれはただ暗いばかりではありません。消滅の後には開花が続くからです。”

引用: フール・アル・カシミ、「開催概要」、あいち国際芸術祭2025. <https://aichitriennale.jp/outline/index.html>, (参照 2025-10-31).

*Adonis, "An Introduction to the History of the Petty Kings," A Time Between Ashes and Roses, 1970.

Guide Map

愛知芸術文化センター
Aichi Arts Center

愛知県陶磁美術館
Aichi Prefectural Ceramic Museum

瀬戸市のまちなか
Sei City

Aichi Triennale 2025:
A Time Between Ashes and Roses
9.13-11.30.2025



あいち
2025
灰と
薔薇の
あいまに
国際芸術祭

上記の言葉は、国際芸術祭「あいち2025」の芸術監督であるフール・アル・カシミさんが今回のテーマに込められた思想の一端である。戦後80年。世界では、終わりの見えない戦争と暴力が続いている。この現実に、私たちは無意識ではいられない。現代美術が「感性の革命」であるとするならば、この現

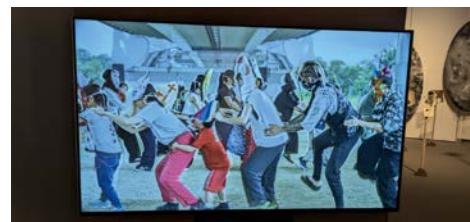
実に思いを馳せる作家や作品が多いことも頷ける。

今回の芸術祭では、そうした世界情勢を背景に、「灰と薔薇のあいまに」というテーマに呼応する作品が数多く展開された。会場は愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなか。加えて、瀬戸現代美術展2025などの連携事業や小原瀬戸芸術祭などのパートナーシップ事業も前回より充実し、地域文化の掘り起こしと国際的な交流の両立が試みられた。愛知県の文化的資源を丹念に掘り下げる作家たちの姿勢により、地域の歴史の重みを改めて気づかせてくれた。

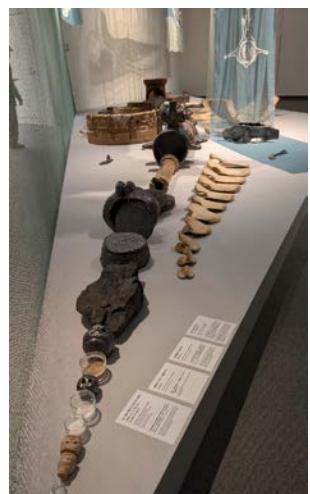
以下、会場ごとに特徴的な作品と作家を取り上げていく。

【愛知芸術文化センター】

◎イキバウイクル (2021年、韓国ソウルで結成) の作品は、豊田市で開催された「橋の下世界音楽祭」を取材対象とした映像作品。その中でも「扉開けてくんろ」からは、1960年代から1970年代にかけて活動した名古屋のパフォーマンス集団「ゼロ次元」を彷彿とさせる。



イキバウイクル
「扉開けてくんろ」
展示風景



◎是恒さくら (1986年生まれ) の作品は、捕鯨技術の変換や民話などのイメージの変遷をドローイング、刺繡、立体作品として見せてくれる。愛知県の渥美半島や知多半島南端の師崎では、古くから鯨類との関りがあった。作品には八百富神社（蒲郡市竹島町）の絵馬が展示されていた。古い窯の煉瓦に浮き出した結晶が不思議である。

是恒さくら「古い窯の煉瓦に浮き出た結晶」
展示風景

◎小川待子（1946年生まれ）は、鉱物の美しさの中に「かたちはすでに在る」という考え方を見出し、ゆがみ、ひびや欠け、釉薬の縮れなどの性質を活かし、始原的な力を宿す立体作品を制作している。「水盤」からは、物質そのものを表す1970年代の作家グループ「もの派」を連想させる。



小川待子「水盤」
展示風景

◎札本彩子（1991年生まれ）は、食をテーマに制作活動をしている。2023年の国際芸術祭地域展開事業「なめらかでないしぐさ 現代美術 in 西尾」では鮭、今回の「いのちの食べかた」は牛肉の枝肉とステーキがモチーフであった。



札本彩子「いのちの食べかた」
展示風景

【愛知県陶磁美術館】



◎ワンゲシ・ムトゥ（1972年生まれ）の作品は、「人間の表象」というイメージの集積である。巨大な蛇の神話的な営みから、私たちの価値体系に疑問を投げかける。

ワンゲシ・ムトゥ「眠れるヘビ」
展示風景

◎Barrack（古畑大気 + 近藤佳那子）は、2017年に愛知県で結成されたアートユニット。本作は、週替わりで展示作家が入れ替わるカフェでの展示であった。写真の作品は、鈴木優作の陶芸作品。

Barrackによる鈴木優作の陶芸作品
展示風景



【瀬戸市のまちなか】



◎佐々木類（1984年生まれ）の作品は、旧日本鉱泉（銭湯）で展示された。植物の記憶を集積したガラス作品である。緑色のガラス絵画が風呂場にあでやかな輝きを与えた。

佐々木類「忘れじのあわい」
展示風景



◎アドリアン・ビシャル・ロハス（1980年生まれ）は、廃校になった旧瀬戸市立深川小学校で作品を展示した。止まった時間の中に子どもたちの声が蘇る。教室全体に張り巡らされた物語のようだった。

アドリアン・ビシャル・ロハス
「地球の詩」
展示風景

「文化を重視する時代」その果てに見える風景

1979年、時の大平正芳首相は施政方針演説で「経済中心の時代から文化重視の時代に至った」と語った。しかし1980年代に「文化」が重視されるようになったのは、政策の転換によるものではなく、外発的な経済成長の破綻に伴う必然だった。公害を垂れ流す供給型産業社会は、消費集約型社会への構造転換を迫られたのである。この時期の美術館建設ブームも、バブル景気に乗ったいわゆる「箱物文化行政」にすぎなかった。現在、それら美術館は民営化・第三セクター化され、展示空間のために作家が生産されるという、本末転倒な状況が起きている。1990年代後半以降の行政改革をはじめ、国立博物館や美術館、研究所の文化的な価値の維持と社会が負担せざるを得ないコストの両立という難しい課題に直面している。

博物館・美術館の本来の役割は、地域に根ざした文化の集積地であるべきだ。バブル期の派手な演出は功罪を生み、批評の消滅と現状追認のジャーナリズムの横行も課題となった。現代美術が現代たりうるのは、現在の状況をどう捉え、当事者として格闘するかにかかっている。作品制作の発表の場が美術館のみという閉塞状況の崩壊は、映像作品やインスタレーション、パフォーマンスなど、新しい表現の誕生を促し、日常の場を〈表現〉へと向かわせた。こうした機会の充実などにより、本当に文化が重視されることを願ってやまない。

#zoom up

ズーム・アップ

俳優
くろ こ う ち あや

黒河内彩さん

名古屋を拠点に、幼少期から今日まで舞台と共に歩み続けてきた黒河内彩さん。お話を伺うだけでも、舞台と一体となった“演劇人”としての歩みがひしひしと伝わってきました。舞台で生き生きと人生を表現し続ける黒河内さんは、名古屋の演劇文化に灯る“光”的です。舞台の上に立つその姿は、これからも観る人に感動を与え続けてくれることでしょう。

(聞き手:常磐津綱鵬)



もの静かな少女が初めて立った舞台

私は、愛知県尾張旭市の生まれで、音楽好きの母のもと、3人姉妹の次女として生まれ育ちました。姉と妹はとてもおしゃべりで、間に挟まれた私は一言も発さずに1日が終わるような物静かな子どもでした(笑)。

でも不思議なことに人前に出ることは平気で、2歳のとき、三重県の長島温泉の演芸場で、自分から舞台に上がって、姉と二人で当時流行っていたアニメ「キャンディ・キャンディ」の主題歌を歌い、母と祖母をびっくりさせたそうです。それが私の初舞台です。母は音楽が好きで、子どもの頃からコンサートやお芝居に連れて行ってくれました。その頃に夢中になって観た、劇団うりんこの「ガンバとカワウソの冒険」



2歳、人生の初舞台。長島温泉で姉と「キャンディ・キャンディ」を歌う(右)

や「ロボットカミイ」がお芝居との出会いです。

小学3年生の8歳の時に、名古屋少年少女合唱団に入団しました。初めてのステージは東山動植物園。当時、名古屋にコアラがやってきたばかりで、コアラを歓迎する歌を歌つたのを覚えています。ステージを終えると、母から「口の開きが小さい、目がきょろきょろしている」と言われショックでした

(笑)。それからの10年間は、数えきれないほどたくさんの舞台に立ちました。その“喜び”と“厳しさ”をめいっぱい感じながら。



名古屋少年少女合唱団の東山動植物園のコアラ初来日のイベントに出演(8歳、右)

東京での学びと帰郷

高校を卒業して、地元の大学の英語学科に進学したのですが、舞台が好きだという想いが抑えきれず、大学を辞めて玉川大学文学部芸術学科を受験しました。実はこの時、親にも告げずに退学して受験したのです。周りが唖然とする中、母は私がやりたいと言うことにNOとは言わず、私の背中を押してくれました。東京で一人暮らしをして、ミニシアターや美術館を巡ったり、大学内の劇場で仲間と夜まで大道具を作ったり、たくさんの刺激を受けました。何でもやってみないと気が済まない性分で、やってみて失敗して、気づくことの繰り返しでした。今でも大学時代は、感性を育てる時間だったと思います。



玉川大学演劇スタジオ前で友人と
ロルカ作「ベルナルダ・アルバの家」の公演中(中央)

卒業の頃ともなると、同級生達は文学座や劇団四季の研究生といった進路が決まっていましたが、私は事情があって、どうしても名古屋に戻らざるを得ませんでした。名古屋で演劇を続けるため、インターネットで「名古屋 劇団」と検索したところ、最初に出てきたのが「劇団シアター・ウィークエンド」でした。

代表の松本喜臣先生の写真を見た瞬間、その強烈な目力のインパクトに「あ、NHKの控室にいた人だ!」と、中学生

の頃に出演していたNHKの番組の記憶が蘇り、それがきっかけとなり2000年に入団しました。



劇田シアター・ウィークエンド創立50周年記念公演
「音吉物語～帰り花 咲きて誇らし 小野浦の浜～」

人生の転機と舞台への復帰

2002年の結婚を機に神戸に転居することになり、劇団を離れました。翌2003年に長女が生まれ、再び名古屋へ戻り、2006年には長男が生まれ、毎日が目まぐるしく過ぎました。そんな中でも、ずっと心のどこかに舞台への想いがあって。ある時、劇団の公演に行くと、その想いを見透かすかのように、松本先生に「芝居、続けろよ。」と言われ、子連れでは稽古場で迷惑をかけると躊躇する私を「子どもが泣いたくらいで集中力が途切れるなら、役者なんてやめたほうがいい。」と笑い飛ばしてくださいって。その言葉をきっかけに、2006年に劇団に復帰しました。娘と生後6か月の息子を連れて稽古場に通い、授乳の時には稽古場の入り口で先輩が見張り番をしてくれたり、本当に仲間に助けてもらいながらの演劇生活でした。

憧れの俳優との共演、そして「ゼロの焦点」

2013年、名古屋市文化振興事業団設立30周年記念事業として上演された「國語元年」では、幼い頃、私のスターだった劇団うりんこのいのこ福代さんや大谷勇次さん、名古屋で活躍する俳優の方々との共演が叶い、この作品が様々な舞台に出演する大きなきっかけとなりました。そして2016年、



名古屋市文化振興事業団設立30年記念事業
井上ひさし作「國語元年」(前列 左)

“劇場は市民が集う広場になる。劇場はひとがつながる広場になる”をコンセプトに始まった「なごや芝居の広場」シリーズで、名古屋の錚々たる演劇人の方々と一緒に舞台を創る機会に恵まれ、そこでの出会いや経験が、私にとってはキラキラとした宝石のような宝物になりました。特に2019年の「ゼロの焦点」は一生忘れられない舞台です。初日の4日前、準主役の方が体調不良で降板せざるを得なくなり、急遽私が代役を任せられました。あの舞台ほど“覚悟”という言葉の重さを感じたことはありませんし、貴重な経験だったと思っています。



なごや芝居の広場
「ゼロの焦点」(右)
(撮影:服部義安)

人の出会い、つながり、支え合いで演劇は成り立っています。それは、私の人生そのものです。私が演劇を続けてこられたのは、人に恵まれてきたからです。そして演劇の道を歩いてきて今思うことは、演劇にはチカラがあるということです。「どんな苦しい経験も悲しみも、自分の糧になる」のが俳優の仕事です。色々な役の様々な人生を生きることで、自分ではない誰かの想いを想像して共鳴する。そうすると、人間の可笑しみや、人生への愛おしさが湧いてくるんです。舞台を通して、そんな演劇のチカラをみなさまにお届けできたらいいなと思っています。



なごや芝居の広場「樂屋 一流れ去るものはやがてなつかしき」
(撮影:服部義安)
令和6年度名古屋市民芸術祭特別賞(精励賞)受賞作品



チケット取扱い

●名古屋市文化振興事業団チケットガイド

TEL 052-249-9387 (平日9:00~17:00/郵送可)

●名古屋市文化振興事業団が管理する文化施設窓口(土日祝日も営業)

※工事休館等がありますので、ウェブサイトでご確認ください。

2026
2/14 Sat

18:30開演/17:45開場

会場

名古屋市青少年文化センター
アートピアホール

入場料 [全自由席]

一般 4,000円

友の会・障がい者等 3,500円

大学生(25歳)以下 2,000円

主催

公益財団法人
名古屋市文化振興事業団いつでもどこでも。
スマホやタブレットで「なごや文化情報」!「なごや文化情報」
マルチデバイス対応の
お知らせ

1984年4月の創刊以来、名古屋圏域の文化芸術を広く紹介してきた「なごや文化情報」。

スマートフォンやタブレットで、いつでもどこでも、気軽に手軽にご覧いただけるよう、ウェブサイトのマルチデバイス対応を準備中です。



2026年6月発行のsummer号から対応予定!

「なごや文化情報」に関するアンケートのお願い

右記の質問にご回答いただき、Googleフォーム、メール、FAXまたは郵送にて**2026年2月20日(金)【必着】**までにお送りください。ご回答いただいた方の中から抽選で20名様に名古屋市文化振興事業団の主催事業鑑賞補助券500円分をプレゼントいたします。

※当選の発表は景品の発送をもって代えさせていただきます。お預りした個人情報につきましては、当該アンケートの事務連絡のみに使用させていただきます。

【宛て先】〒460-0008 名古屋市中区栄三丁目18番1号 ナディアパーク8階
(公財)名古屋市文化振興事業団 文化情報アンケート係
FAX:(052)249-9386 Email:tomo@bunka758.or.jp

●電子チケット



1. 内容についてどう思われますか。 ①よい ②まあよい ③あまりよくない ④よくない

2. 「なごや文化情報」の中で関心を持つ記事はなんですか。(複数回答可)

①表紙 ②Pick Up Gallery ③随想 ④この人と… ⑤視点 ⑥#zoom up

⑦1年をふりかえって(Spring号のみ掲載)

3. 今まで「なごや文化情報」をお読みになって感じたことをご記入ください。

4. 今後「なごや文化情報」で取り上げてほしい話題やコーナーがありましたら、ご記入ください。

5. ご回答いただいた方の ①お名前 ②年代(30代など) ③郵便番号 ④ご住所 ⑤電話番号

6. ご感想などは事業団ウェブサイトや定期刊行物などに掲載させていただく場合があります。

掲載してよろしいですか。 ①はい ②いいえ

7. (「はい」と回答された方のみ)掲載するお名前(ペンネーム等)をご記入ください。

Googleフォームで簡単回答! 二次元コードからアクセス

叙勲・褒章
表彰状レプリカ
製作サービス

- ◆ 印刷のプロが1点1点手作業で複製します。
- ◆ 用紙にもこだわり実物に近いものを採用。



お問い合わせはこちらへ

駒田印刷株式会社 tel.052-331-8881
〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12
<https://www.kp-c.co.jp>WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

舞台音響／映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

この領域を超えて最高のパフォーマンスを。

お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市千種区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

-
- ①舞台の企画・制作マネージメント
 - ②イベントの企画制作
 - ③芸術団体のコンサルティング
 - ④舞台・イベントの運営
-
- NP**
MANAGEMENT PRO
株式会社マネージメント・プロ
- 〒461-0004 名古屋市東区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097
- Web:www.mane-pro.com
- E-mail:mame-pro@mame-pro.com
- デザイン・印刷／駒田印刷株式会社
- 令和7年12月25日発行(年4回6・9・12・3月の25日発行)通巻416号
- 編集発行／公益財団法人
名古屋市文化振興事業団
- 〒460-0008
- 名古屋市中区栄三丁目18番1号 TEL(052)249-9386
- FAX(052)249-9386
- HP [https://www.bunka758.or.jp/](http://www.bunka758.or.jp/)